



TITLE:

各地のたより

AUTHOR(S):

CITATION:

各地のたより. 天界 1939, 19(220): 319-320

ISSUE DATE:

1939-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167843>

RIGHT:

各地の

大阪ブラネタリウムだより

た　よ　り

—大阪—
 ブラネタリウム
 堅田　だ　よ　り

☑今年は昨年以上に、毎日おびたゞしい學校見學團が來觀してゐる。毎日團體數は數校に及び、ブラネタリウムのドームはハチ切れそう！……こうして春が過ぎ夏が來た。

☑5月2日の珍しいスピカ星の掩蔽現象を本館で初めて觀測を試みたが、市街でも興味を持つて觀られるから、今後輝星の掩蔽觀測は出来る丈け續けてみる豫定である。

☑本館としての天文に關する話題が絶えず生れるので、5月末からブラネタリウム月報を補ふ意味で、「星の劇場=ユース」として特報を不定期に發行することにした。これらの月報や特報は發行の都度、京阪神の各協會支部の機關紙や回報が發送される時、同封して各會員に配布されてゐる。地方の方でこれらの印刷物を御希望の方は、科學館内大阪支部宛に御申込み下さい。部數は無制限に差上げます。

☑南支方面、殊に海南島に遠征してゐる未知の勇士達から、南十字星の間合せや、星の實用方面の質問が續々申出でられるので、初めは直筆星圖で返信してゐたが、今度天文協會大阪支部の名のもとに科學館にて「戦線の星圖」を急ぎ印刷して、北、中、南支の前線へ送ることになつた。幸ひこれは各方面に非常に悦ばれてゐる。

☑15年一度の火星の大接近を迎へて、今夏は天文協會大阪支部を中心に、科學館を始め其他の場處で、火星觀望會が計畫されてゐる。

☑ブラネタリウムでは7月1日より8月末まで、夜間公演が始まる。時間は19時半より21時まで。

7月の話題 「火星の往來、銀河の彼方」

8月の話題 「月世界を巡る」

——(6月25日、高城記)——

アメリカ天文學會總會 第62回總會が來る八月7日から9日迄ベリクリ市加州大學で開かれ、9日午後にはリク天文臺ヘドライブ、其後、11日には新パロマ天文臺ヘドライブ、又12日にはパサデナ市の工學院で200吋大反射鏡の工程を參觀する筈である。

堅　田　だ　よ　り

★近江八景の一つ、「堅田の落雁」で名高い堅田の浮見堂は唐詩の水碧沙明兩岸臺とも言ふべき境地である。浮見堂は麗湖ビソコに架けられた小佛閣で、其の昔横川^{よかは}の恵心僧都が魚の供養にと創め、千體彌陀佛を安置したのである。舊構荒廢の後、櫻町院の内旨に依つて御能舞臺を下賜され再興を見、禪僧が守つて「海門山満月寺」と呼ばれる。明治29年の大水害の時大破して佛體が若干流失し、又昭和10年の大暴風雨に一瞬にして吹つ飛んだが、昨12年の初夏に改築なつて琵琶湖巡りの人々の眼を楽しませて居る。

★惜しむらくは新装の此堂の風情を添える雁は近年東洋紡績堅田レヨン工場の噴煙に遮げられて絶對に見られず、僅か鴉が飛び過ぎる位で、名物「落雁」の名の押物と「雁の里」が僅かに名残を留めて居る。

★事務所前の堅田小學校は縣下でも有名な小學校であるが、此の校門横には會長山本博士と高城氏との合作である經緯度測定臺がコンクリートで固められて居る。東經 $135^{\circ}44'37''.5$ 、北緯 $35^{\circ}06'49''.6$ と誌した銅板も人絹工場の二硫化炭素(CS_2)の爲に1年経つた今日早くも赤黒くなつて終つた。

★堅田は俳聖芭蕉が當町本福寺の弟子千那をよく訪れた地である。元祿四年八月16日に芭蕉翁（當時48歳）は16夜の月を賞して詠んだ句に、
「鎖あけて月さし入れよ浮見堂」「やす々々と出ていざよふ月の雲」がある。翁の文「桃青既望賦」に曰く「……望月の殘興なほやまず、今宵は二三子にいさめられて舟を堅田の浦に馳す。……やがて岸上に榻をならべ筵をのべて、おの々々いざよひの宴を催す。月は待つ程もなく、差出てければかの堂上の欄干によれば、三上水臺は左右にわかれて、その間に十二峯のかげをぬす。……やがて其月の雲をはなるゝほど、水面に玉塔の影をくだきて、あらたに千體佛の光をそふ。誠やいざよひの空を世の中にかけて、かたぶく月のをかしきのみかはと、京極黃門の歎息の詞なるを、我は今宵しも此堂に遊びて二たび恵心僧都の衣をうるほす。無常觀想の便ならずといふに、あるじは興に乗じて乗れる客を、などさは興盡きて歸さんやと、もとの岸上に盆をあぐれば、月は横川の嶺に傾きて姑蘇城の鐘も聞ゆなるべし。……」と。爾來地球は248回公轉した筈。

★辨天丸のドラが減水した麗湖上に響き渡つて、水泳客と田草取り達の胃袋にしみわたる季節ではある。（佐登兒誌）